



SONG

路地の歌声

まただ、この路地を通りかかると、聞こえてくるあの歌。
あの歌が聞こえる。
いつも通る薄暗い路地のどこからか聞こえて来る。
悲しい歌を女が唄っているのが聞こえる。
そんなわけがない、そんなことがあるものか。
そんなふうに聞いてしまうだけなのだ。あの歌が聞こえるなんて……
あいつが俺を許すわけがない。いったいあれから何年経ったと思うんだ。
13年……俺の髪も、もう真っ白になった。あれから13年……待っているわけがない。
それに、ここは俺達の町からは遠く離れて、もうすぐ4月になるというのに、空気は氷のように冷たく、吹き荒む風が体に痛い。こんなところに来るものか、こんな俺のために。
あの頃、あんなに荒涼として哀れに見えていた俺達の町が、今、どうしようもなく懐かしい。
帰りたい。帰りたいと思うのか、いまさら……
また聞こえる。あの歌が……馬鹿な事を。俺は、それでもこの路地を通る。
俺達のあの歌を唄っているのがだれだとしても、俺はこの路地を通る。
声をたよりに、この路地をたどって行けば会えるかもしれない。
そう、そんな望みを少しの間もたせてくれている。
俺は、知りたくない。だれが唄っているかなんて。
だれでも、いい、唄っていてくれ、俺が今度は本当に、くたばるまで……

泣きたくて 月の花野に うずくまる

網走刑務所受刑者の句

Milk Hall

MAIL

address

2000年のミルクホールお客さま名簿更新のお知らせです

ミルクホールでは、ご希望のお客さまへミルクホールタイムスを郵送しております。郵送ご希望の方は当店にてお申し込み下さい。1999年までのお客さまの名簿は、2000年3月をもちまして、一時抹消されますので、ご面倒ですが、すでにご登録のお客さまも改めて更新の手続きをしてくださるようお願い致します



〒248-0006 鎌倉市小町2-3-8 FAX 0467-22-1179

鎌倉の猫事情 その六

COLUMN

一時、界限をうろろろする猫たちもめっきり減ったと思われましたが、どうやら代替わりしたようで、あちこちの家からに新顔の猫が顔をのぞかせるようになりました。古い代の猫はもう一匹も見かけませんから、ボスの座はまだ空いていることでしょう。

吾がミルクホールも長年の付き合いだったシュガーちゃんを亡くしたばかり、敬意を表して一周忌過ぎた頃、めぼしい捨て猫を探しておりました。敬意を表してとは言っても、あまりに長生きしすぎて、晩年は足腰も弱り歯槽膿漏やら皮膚病やら、果てはお尻の方もゆるくなり始め、寝たきり猫にならなかったのは幸いでしたが、面と向って「もっと小さくて可愛くて柔らかい猫がいいなあ」などと悪態をつかれることもたびたびでした。鎌倉市では、15歳を越えた長寿の猫は表彰されることになっているそうですが、シュガーちゃんの場合は結構大きくなってから来ましたし、家出も繰り返し、家人も推定15歳とし知らないのでからあきらめて申告しなかったのですが、申告したら、いったい何が頂けたのでしょうか？

シュガーちゃんがはいよいよ最後と言う時は、ずいぶん悲しい思いをしました。亡くなる3ヶ月前頃から急に毛並みが良くなり元気になりまして、この分だとまだまだ長生きするなあなんて思っていたのですが、私が2-3日家を留守にして帰ってみると、変わり果てた姿で物干し台にうずくまっています。驚いていつも寝ていた部屋へ入れてやると、部屋の中を這いずりながらうろろろしていました。ああ、死に場所を探し始めたのかなと思いました。数時間すると、どうやら死に場所をここに決めたというように、落ち着きました。こんどは寝場所を探してベッドに上がるのですが、その力がありません。あまりの姿に涙が出ました。そしていつものようにベッドに乗せてやりました。それから2日間シュガーちゃんは静かに苦しみ

ました。食事はおろか、もう水も呑めなくなっていました。3日目の午後、自力でベッドから降りて横たわりました。いよいよその時が来たのだと思い、今度は床に座布団を敷いて寝かせました。そしてとうとう動かなくなりました。それでもまだその日の夜半、午前3時頃までは息があったと思われます。だんだんと身体が冷たくなりついに、眠るように息をひきとったのです。横で見ている私にも気づかないくらい静かで、おごそかな感じさえする最後でした。

さて、一年が過ぎ悲しみもすっかり癒えて、捨て猫探しを始めたものの、今捨て猫は見かけません。そこで心当たりを考えてみると、ふだん仲良くしている三重県の骨董業者さんと古川さんという家族を思い出しました。その一家は「捨て猫・捨て犬一時預かりボランティア」という長い名前のボランティアをやっているのです。一家はよくまだ乳飲みの子猫や子犬を車に乗せて骨董市にあらわれ、哺乳瓶でミルクを飲ませたり、おしっこをさせてやったりして面倒を見ています。三重県というのは少し遠い気もするけれど、あの一家ならということでもかく電話してお願いすると、喜んで快く引きうけてくれました。

それからまた3ヶ月、古川さんは吟味に吟味を重ねてくれたようです。何より小さい内に飼ったほうがいいという事を考えてくれました。その上、元気がよくて毛並みや器量もまあまあという、そうそうはいないものです。途中候補の猫もいたのですが、ちょっと育ち過ぎだったそうです。縁のものだから、そんなに気をつけてくれなくても……と言いましたが、まあちょっと待って下さいと探してくれたのです。きっとだれからも候補にあがらなかったような、不器量だったり身体が弱い犬猫は、ああいう方達が面倒見ているのでしょう。結構大変なんだったこともよくわかりました。

古川さんから電話の「いましたよ！」という声は、明るく自信に満ちていました。

次号、私達は、期待に胸膨らまし、その子猫を迎えるべく名古屋へと車を走らせます。

to be continued

